

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Académie des Jeux Florauxについて : ロマン主義理論闘争に関する研究の一環として
Author(s)	佐藤, 弓葛
Citation	フランス文学 , 6・7 : 1 - 18
Issue Date	1965-07-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040862
Right	
Relation	



Académie des Jeux Floraux について

——ロマン主義理論闘争に関する研究の一環として——

佐 藤 弓 葛

フランスでは大革命以後すべての分野に新しい尺度が用いられ、国民は旧態を脱するの忙しかった。しかし芸術・文学の世界に於いては、人心の異常な激動に続く活動期は、精神を集中し、冥想にひたる文学的風土に相応しくなく、特に洗練された生活を尊ぶパリーにあっては古典芸術の伝統が根強く、romantiqueの新しいgenreは冷やかしの対象にこそなれ、パリーに芽生え、そこですこやかに育つことは至難なことであった。ところが、地方アカデミーでは却ってgenre romantiqueに対する関心が高まり、特にトゥルーズ、ディジョン、アラス、マコンの地方アカデミーの活躍には刮目するものがあった。パリーの詩人達もこれらの地方アカデミーのコンクールに作品を提出して登竜門とした。従って1824年に至って、パリーで華々しく戦闘を開始したロマン主義の理論闘争の戦士達は大方地方アカデミーの出身者か、そこで活躍していたもので、彼等が述べんとする主義主張は1824年以前に既に明らかにされていることがわかる。かかるが故に、これ等の地方アカデミーの研究は、19世紀フランス・ロマン主義を少し深く掘り下げて調べる場合には欠くべからざるものであると云えよう。そこで、今回は先ず、トゥルーズにあるAcadémie des Jeux Floraux (文華アカデミー) について、またこのアカデミーがロマン主義論争にどのように介入したか

を調べてみたいと思う。

我々が文学史をひもといていると、時々次のようなことによく当面する。それは文学史には記載されているが、その資料を探ぐるとなるとなかなか困難であること、しかもそれはどうしても一応深く極めて置かないと研究を進めて行くにつれ、不安がともない、支障をきたすことにもなると云う事柄で、この文華アカデミーもその一つに数えられる。

Van Tieghemの“Le Romantisme français” (1944年) 「フランス・ロマン主義」(クセジュ文庫)の第2章「セナクルと理論」の書き出しに次の文章がある。

「わが国の文学を更新しようとする必然性が、教育のある諸階級や文壇のグループや地方アカデミーの大部分によって、ついに承認されるに至ったのは1819年のことであった。有名なトゥルーズの「文華アカデミー」はこの年に、その競技会の課題の一つとして次のような問題を提起した。「世人からロマン的という名を与えられた文学の特徴は、どのようなものであろうか、またこうした文学は古典主義文学にどのような助力を与え得るであろうか」(辻昶氏訳)

Albert Thibaudetの文学史 Histoire de la littérature française 「1789年から現代へ」の第2篇第5章のV. Hugoの箇処には

「16才のとき、ヴィクトール・ユゴーは一篇の悲劇をものし、小曲で翰林院の推称を得、更に彼の詩はトゥルーズの文学会「ジュール・フローロー」から栄冠を授けられた。」

とある。更に進んで第6章「セナークル」の箇処にも次のように出ている。

「スウメ、ギロー、ジュール・ドウ・レッセギエの3人のラングドック人が「ラ・ミューズ」に名をつらねている。いずれも1790年以前に生れた「ジュール・フローロー」の詩人である」

René Jasinski の文学史 tome II の441頁にはこう出ている。

「ヴィクトール・ユゴーの天職はとみに早く、彼は「シャトブリアンになりたい。さもなければ何にもなりたくない。」と望む。彼はアカデミーの詩のコンクールに数回応募し、トゥルーズのジュール・フローローでは2回栄冠を受け、文学の道で確固たる地位をかためる」

また、526頁には、

「1811年トゥルーズのジュール・フローローで栄冠を受けたA・スウメは *auditeur* として内閣に入り、王政復古下に辞め、「コンセルヴァートル」に、それから「ミューズ・フランセーズに協力し…」とある。更に528頁の *Rességuier* の項で「…トゥルーズのジュール・フローローの会員で、忠実なる正統王朝派で、郷土の文化の有力なメンバーに止まっている彼には誠実さがある。」

ロマン派だけを取扱った *Pierre Martino* の “*L’Epoque romantique en France*” 「フランスに於けるロマンティック時代」の第9章には3頁に亘って出ているから、

前記3者のものよりだいぶ詳しい。

もともと、*Académie des Jeux Floraux* と云う名称はフランス南部のラングドック、即ちプロヴァンス語及びプロヴァンス文学の研究者にとっては実に身近な名称なのである。そして現代でもプロヴァンス文学の中心となり、大いに活躍している地方アカデミーであることは、プロヴァンス文学愛好者の間では周知の事実である。



15世紀の半ば即ち1356年から1453年に亘る、いわゆる百年戦争によりイギリスに侵略されフランス全土が疲弊した時、人心を楽しませる文化的集いを作ろうと計画して、トゥルーズに誕生したのがそもそもの始まりであり、その創設者は多分に理想化された伝説的美貌の尼僧クレマンヌ・イゾール (*Clémence Isaure*) とされている。

1323年に *troubadours* 達が創設した文学会で、欧州で最も古いものであると記している辞典^①もあるが、しかし *Académie des Jeux Floraux* の実際の創立時期が何年であるか明確に知ることは出来ない。

Clémence Isaure が実在の女性であったにせよ、彼女の生涯ははっきりしていない。しかし、それが却って神秘性に包まれ、ミューズの女神に一致して不滅の象徴になっている。そこから、この文学会をまた *Académie de Clémence Isaure* とも呼ぶのである。

わが香りを受けよ。南欧のおとめ
吟遊詩人の詩歌を讚美するおん身！
彼等に靈感を与えたおん身！おん身の
やさしい教えによって天才の氣力を目ざ
めさせたおん身よ！

戦国の時代に於ける愛の使者 平和の
天使の如く、おん身は天界より降りて来
た。そして戦の長いおたけびの後に
甘い調和と優雅な歌をつづけしめた。…

これはロマン派の詩人 Jules de Res-
séguier が Clémence Isaure に対して詠ん
だ熱誠あふれる讃歌のはじめの方の数節で
ある。かくして、この文学会は哲学、神学
を除く *gaie science* 即ち南仏の文学、特に
詩歌の集いとして15世紀の後半から存続
し、troubadours 達が自作を読んで技を競
ったのである。

この文学会がアカデミーの組織になっ
たのは1694年で、そのメンバーは36名で
ある。1698年からはアカデミー機関誌を
発刊している。1725年(ルイ15世の時代)
には40名のメンバーとなり、彼等は
Mainteneurs と呼ばれた。大革命の間は
一時中絶されていたが、1806年2月9日
に再開され、ロマン派の若き詩人を数多
く輩出せしめた。そして今日では専ら
プロヴァンス文学の本拠として活動して
いる。

このコンクールで入賞した詩人には、
近くの野原に美しく咲き香る野の花が
与えられた。そこから *Jeux Floraux* (文
学華賞) の名が生まれたのである。賞は
やがて本物の花と共に金製、銀製で花
の形を型どったものが与えられる様
になる。同時に賞金も多少与えられた。
その種類は9つで次の通りである。

- 1 Eglantine 野ばら
 - 2 Jasmin ジャスミン
 - 3 Amarante 鶏頭
 - 4 Immortelle 麦わら菊
- 以上1から4までは金賞—

- 5 Primevère 桜草
- 6 Lis 百合
- 7 Violette すみれ
- 8 OEillet カーネション
- 9 Souci 金せんか

—5から9までは銀賞—

さて、私の研究の対象となる *Académie
des Jeux Floraux* はロマン派時代である
から、云うまでもなく大革命以後再開
された1806年から1824年のロマン主義
理論闘争を経て1830年に至る期間で
ある。そこで先づ、このアカデミーの
再興を辿って見よう。

大革命の嵐はフランス全土に災害を
もたらした。それは恰かも百年戦役
に消耗しつくしたフランスを彷彿さ
せるものがあった。そしてこのアカ
デミーの再開も、丁度災害の中から
文学を求めて生れ出た創設期に似
たものが感じられる。再開に努力
した人物はトゥルーズのリセーの
創設者 Alexandre Jamme と
Jean Castillon の両氏と市長
の Picot de Lapeyrouse 氏である。

1806年2月9日の初会合で市長は
再興にあたって、革命で絞首刑とな
り断頭の露と消えた会員 (*Mainteneurs*)
の補充から手をつけ2月26日に
その選挙を施行することが出来た。
丁度ナポレオン帝政下の時で、
同年5月3日に第1回の会合が
^{セアンス} Clémence Isaure と
Napoléon に対する讃辞をかかげ
て、いとも厳粛に行なわれた。
Alexandre Jamme は当時の内務大臣
Portalis と文部大臣 Fontanes
に再開を報告すると、両大臣から
その果敢な努力に対して祝福を受け
た。会 員 は ^{マントヌール} ドラードに ^{エグランテイエヌ} 野ばらを探し
出掛け、バラの冠を作り、祭典を
革命以前の姿に戻すように努めた。
それ以来、伝統は再生し、華賞は
再び優秀な詩人達をうみ

出す不滅の花となった。Hugo 兄弟をはじめ A. Soumet, Jules de Rességuier, Guiraud, Millevoye, Viennet, Madame Tastu 等の受賞者を一瞥しただけでも、このアカデミーが当時如何に人気があり、同時に如何に文学的勢力を持っていたかは容易に知ることが出来よう。こうしたロマン派の詩人達とアカデミーの関係は後述することにして、その前に Académie des Jeux Floraux のなすべき仕事に目を向けて見よう。



Académie des Jeux Floraux の主要行事は毎年コンクールを開いて、応募者から優秀な作品を選考して華賞を与え、それを機関誌に発表することであった。応募者は題材を自由に選ぶことが出来た。ただし宗教と政府を中傷する作品、または社会の安寧やムルスを傷つける作品は除外された。この他翻譯、模倣、剽窃、偽名それから既にこのアカデミー或は他のアカデミーに提出した作品も除外された。

題材には次の種類がある。

Discours, Odes, Elégies, Eglogues, Idylles, Poèmes, Eptires, Hymnes, Sonnets, Ballades である。

アカデミーは規則に極めて厳格であった。一例を挙げれば、有名な“Elégies”の詩人 Millevoye (1782-1816) が 1810年に提出した Ode は入賞し、銀賞「すみれ」を受けたが、これが後になって Jomard の作品であることがわかり失格となった。応募者は作品を三部提出すること、参加作品は ABC 順に登録される。第一次審査は各種別に行われる。そして3つの事務局で取扱う。そこで第1級、第2級を決め、第3級は賞

外となる。それから総局 (Bureau général) に廻送され、そこで受賞が決定される。受賞決定の際はしばしば激論がかわされる。そして作品の一部を訂正することを条件として入選させることもある。

大抵の作家は受賞の通知を受ければ、総局が要求する訂正には素直に従うのである。それ程このアカデミーには権威があった、また詩人達にとっても入賞はこの上ない名誉であったから、多少訂正される位は問題にならなかったのであるが、なかには自作の訂正要求を頑として受け付けない意志の強固な応募作家もいた、例えば、後に La Muse française の主幹となり 1824年にロマン派の教義“Nos doctrines”を出している Alexandre Guiraud (1788-1847) の受賞作 ode “A mon jeune ami” (1819年) の際とか、Nestor de Lamarque の élégie “Raphaël mourant” (1826年) の入賞の時などがそうである。

アカデミーのメンバーは前にも述べたように特別に Mainteneurs と呼ばれるが、この外に Maître-ès-Jeux Floraux と呼ばれる。謂わば名誉会員とも云えるような者が若干名存在した。これは Mainteneurs の票決に依って決められるもので、このリストには地方名士と並んで数名の大家の名が含まれている。1811年には上院の Daru 伯爵。19年には退役海軍少将 Rochegude 伯爵と Raynouard が選ばれている。フランス南部 Brignoles 出身の François Raynouard (1761-1836) は 1805年に力強い悲劇“Templiers”を上演して、当時の風潮であったギリシャ・ラテンの古代詩のみを模倣・踏襲する絆をたち切って、大成行をおさめ、1807年 Lebrun-Pindare (1729-1807)の席を

受けて Académie française の会員になった帝政下の作家である。彼は Maître の称号を与えられると、感謝状と共に Troubadours に関する研究書と二篇の自作劇 “Templiers” と “Etats de Blois” を Académie des Jeux Floraux に送っている。

つづいて1820年には19年と20年の間に金賞を四回も獲得(Ode sur le rétablissement de la statue de Henri IV ; Les Vierges de Verdun ; Les derniers bardes ; Moïse sur le Nil.) した Victor Hugo が Maître に選出されている。当時の Hugo は Conservateur littéraire を発刊して大いに活躍していた時である。このように若き日の V. Hugo が自由闊達に振舞い、文学的技を練磨することの出来たのはこの Académie des Jeux Floraux に於いてである。

V. Hugo が選ばれた翌年アカデミーは Chateaubriand にも Maître の称号を与えることを計画し、特別に集会がもたれた。そして5月25日の票決で Chateaubriand は Maître に任命された。アカデミーは V. Hugo を通じて称号のディプロームを送るように取計らった。Chateaubriand に対する Hugo の尊敬の念は当時は無限と云っても良い程であったので、Hugo は自分の伝達使命を喜んで果たし、その報告をアカデミーにしている。そして報告の中でも、Chateaubriand を Maître にしたことはアカデミーにとってこの上ない光栄であるが、しいて云えば遅きに失したように感じられたと述べている。それは事実で既に大文豪として名をなしていた Chateaubriand は当時政界に乗出し、1822年の1月にイギリス大使に任命され、つづいてスペイン戦争を提唱し、その勢いで暮の12月には外務大臣

の地位に上ったのであるから Académie des Jeux Floraux が地方アカデミーとして如何に勢力があったとしても、両者の間には余りに開きがありすぎた。従って V. Hugo の奔走がなければ Chateaubriand を獲得することはむづかしかったかも知れない。Chateaubriand は希望にみちた若き詩人を通して、与えられた称号に感謝し、同時に gaie science の名誉を政治の名誉より重んじるから、Maître の称号を Clémence Isaure に返す様なことは決してしないであろうと云う内容の書翰(2)をアカデミーに送っている。

Maître の称号を受けた者は僅かなのであるが、もう一人取上げる必要のある人物がいる。それは “Ossian” の翻訳者であり、また5幕韻文劇 “Omasis” (1806年) を書いてナポレオン皇帝より賞金を授与された Baour-Lormian (1770-1854) である。

彼はもともと印刷屋の子としてトゥルーズに生れ、23才でパリへに出。1795年にタッソーの「解放されたるイエルサレム」 “Jérusalem délivrée” の翻訳を出して、才能を認められ、劇作 “Omasis” によって有名になった。1815年に Académie française の会員に選ばれてからは、アンティ・ロマンティックとなり1824年発表されたロマン派擁護の二作品 Paulin Paris の “Apologie de l'école romantique” と Cyprien Desmarais の “Essai sur les classiques et les romantiques” に対し皮肉な論評をくださった。そこでロマン派の連中からは Baour-Lormian をもじって balourd-dormant 「ねぼすけとんま」と呼ばれ、晩年は惨めな生活を送り Lamartine に助けられたりした。この Baour-Lormian は “Omasis” の成功

とトゥルーズの生れと云うことで1809年6月 Académie des Jeux Floraux の Mainteneur に選出されたのであるが、23才でパリーに出たきり、アカデミーの集会には全然出席しないので問題になった。それでも Académie française の会員になった彼を Mainteneur から締出すことは、会としても容易には決しかね、我慢していた。しかし1823年には再度彼の Mainteneur としての資格が討議され、審議の結果 Mainteneur を辞めさせ、その代り Maître に任命することに決定した。これは Académie des Jeux Floraux の会員の中に、特に Baour-Lormian と親しい友人がいたので、彼等のはからいによって特別に扱われたのである。

Baour-Lormian は Mainteneur から Maître に変わったが Alexandre Soumet はそれとは逆に Maître から Mainteneur に変わった作家である。即ち Soumet は1807年以来幾度も入賞したので1815年2月 Maître-ès-Jeux Floraux に任命された。そして、それから3年して1818年7月にはそれを辞して、Mainteneur に選出されている。Soumet は Chateaubriand の影響を受け、1823年に Guiraud, Deschamps, V. Hugo 等と共に La Muse française を創立し、ロマン主義擁護に活躍した作家であるが、1824年の11月 Académie française に選出されてからはロマン主義に対して批判的態度を示すようになった。

帝政文学時代に大きな働きをなしているこれらの作家が、皆 Académie des Jeux Floraux の Maîtres 或は Mainteneurs であったと云うことは如何にこの地方アカデミーが充実して居り、しかもフランス全体

に名を響かせ、新しい詩人文学者が喜んで応募し、栄冠の名誉をかちとることを望む程尊敬されていたかは容易に理解出来よう。そして F. Ségu の次の表をみれば更にロマン派時代に活躍した実績も、また受賞が如何に厳しいものであったかも明らかになるう。

1807年の応募作品 166名に対し受賞者は2名即ち Elégie と Sonnet 各1篇だけで、39名応募した Odes も120名の Poèmes も123名の Epîtres も受賞が出ていないのである。1820年に於ても127名中5名しか入選していないし、ロマン主義理論闘争の激しかった1824年にも153名中8名である。



論文 (Discours) を募集する時は詩歌の場合と違って Mainteneurs がアカデミーの規則に従って題目の選定をしなければならぬ。そのために特別に委員会がもうけられる。丁度 romantique と classique の genre に関する定義をめぐって世間が騒がしくなりはじめた1819年度の論文題目選定を例に挙げてみよう。

委員会の一員でこのアカデミーの終身書記である Pinaud 氏の報告によると、同年4月2日委員会ではまず、その年の問題を4問設定した。

- (1) ロマンティックと呼ばれるジャンル
の特質は何か。而してそのジャンルは
クラシック文学に如何なる資源を捧げ
得るか。
- (2) 宗教的信仰と調和する神話的敘事詩
の体系を打建てる方法は如何なるもの
ならんや。
- (3) アカデミックと呼ばれ得る一種の文
体が存在するか、存在する必要がある

Tableau des œuvres présentées aux concours de l'académie
des jeux floraux de 1807 à 1830

Année	Nature et nombre des oeuvres présentées										
	Discours	Odes	Elégies	Eglogues	Idylles	Poèmes	Epîtres	Hymnes	Sonnets	Ballades	Total
1807	7	39	25	3	10	20	23	8	31		166
1808	12	58	22	3	9	11	16	19	14		164
1809	9	28	17	2	8	14	21	7	17		123
1810	9	37	10	4	10	10	24	9	21		134
1811	5	19	12	2	8	5	14	12	5		82
1812		18	26	1	5	6	18	13	5		92
1813	15	30	24	2	6	16	19	16	4		132
1814	} 22	67	74	5	13	31	27	41	11		291
1815											
1816		18	17		5	10	3	6	1		60
1817	2	23	19		5	12	16	12	10		99
1818	5	22	18		3	9	16	10	4		87
1819	6	33	17		3	3	11	5	8		86
1820	2	20	11		3	4	14	3	5		62
1821	7	35	32	3	3	12	16	11	8		127
1822	8	28	27	1	2	4	12	9	6		97
1823	6	38	32		4	7	12	7	2		108
1824	13	45	50	3	4	14	9	11	4		153
1825	11	59	68	2	8	9	5	10	4		176
1826	5	44	37		4	2	5	8	1		106
1827	11	35	61	4	4	14	21	7	4		161
1828	18	43	70	4	9	14	11	8	4	1	182
1829	13	46	49	1	9	14	16	12	6		166
1830	6	58	70	4	11	17	24	21	7	1	219

Tableau des œuvres couronnées aux concours de l'académie
des jeux floraux de 1807 à 1830

Année	Fleurs accordées par genre										Total
	Discours	Odes	Elégies	Epiques	Idylles	Poèmes	Epîtres	Hymnes	Sonnets	Ballades	
1807			1						1		2
1808		2		1				1			4
1809	3	1									4
1810		1	1				1				3
1811	1	1	2				1	2			7
1812		1	1			1		1			4
1813		1	1			1		1			4
1814	} 2	1	1						1		5
1815											
1816			1					1			2
1817		1				1					2
1818		1									1
1819	1	3	1				1				6
1820		2					1	1			4
1821	1	2					2				5
1822		3	1		1	1					6
1823	1	2	3			1		1			8
1824		3	2		1			2			8
1825		1	1			1	1				4
1826		1	1				1				3
1827		2	3				2				7
1828		1	1			1	2				5
1829	1	2	1		1		2	1			8
1830	2	2	2			1		1			8

か。

(4) 如何なる程度迄喜劇の中に悲壯性は取り入れられ得るか。

以上の4問について委員会で投票を行った結果、第1問には7票、第2問には3票、第3問に4票、第4問には零と云う結果が現れた。それから第2回、第3回と投票し、結局委員会は第1問に全員合流することに仮決定をみた。そして最終的には第1問の字義の訂正が試みられ、次の通りに決った。

第1問 (訂正前)

Quels sont les caractères distinctifs du genre appelé romantique et quelles ressources peut-il offrir à la littérature classique ?

最終決定の文

Quels sont les caractères distinctifs de la littérature à laquelle on a donné le nom de romantique et quelles ressources pourrait-elle offrir à la littérature classique ?

(ロマンティックと云う名が与えられた文学の特質とは如何なるものか、而してその文学はクラシック文学に如何なる資源を捧げ得るであろうか。)

はじめの4問の時の第1問では genre appelé romantique としているのを最終決定では littérature à laquelle on a donné le nom de romantique と訂正している。これは僅かな字義の訂正の様に見えるが第1問の方で genre romantique となっていて、しかも quelles ressources peut-il offrir à la littérature となっていれば classique と romantique の比重の差が明らかに伺がえる。即ち romantique は classique の一

部であるという観点から問題が提出されている観が強い。それに対し最終決定では一歩進めて littérature romantique と littérature classique をならべたのであるから、Académie des Jeux Floraux 自体が romantique に可成り重みを置いた現れとみることが出来る。これにはA. Soumet の力が大いにあづかっているのである。しかし当時はまだフランスでは romantisme と呼ぶ者は独りもいなかった、それに、romantisme と呼ばれるに至るのは1823年12月以後のことである。

この様にして幾度も討議して論文題目が決められ、それから応募者の作品送付の期日が決められると、アカデミーから正式に発表されて、コンクールが開始されるのである。

以上をもって、Académie des Jeux Floraux の輪廓は大体つかみ得たと思えるから、このアカデミーとロマン主義の関係を前述の懸賞論文を含めて、更に辿ってみることにしよう。

◇ ◇ ◇

先ず、romantique の問題が Académie des Jeux Floraux の懸賞論文の課題に取り上げられるに至る迄のフランスに於ける romantique の胎動を簡単に調べてみよう。

1813年ジュネーヴ生れのイタリア系スイス人 Sismondi (Simonde de) (1773-1842) の “De la littérature du Midi de l’Europe” 「南部欧州の文学について」(5月から6月)、Madame de Staël の “De l’Allemagne” 「ドイツ論」(イギリス版10月)、ドイツ人 Schlegel (Auguste Guillaume de, 1767-1845) の “Cours de la littérature dramatique” (1808年) 「劇文学講義」の

Necker de Saussure (Albertine, 1766-1841) によるフランス語訳 (12月) の出現によって、文学界に於いては romantique に関心を向ける目が俄かに強くなって来た。

Sismondi の作品はプロヴァンス、イタリア、スペイン、ポルトガルの文学に亘る4巻29章からなり、Schlegel の「劇文学講義」ほど大胆でなく、また romantique 的予言も殆んど見出せない。これは彼がジュネーヴで学生に講義したものを多少修正して、まとめたもので、何にも新しい意図はなく、ただ公平な気持と歴史家らしい周到さをもって書かれている。従って文学上の二つのグループの対立もさ程ない、また古典主義に対する厳しい批判も見られない。

(尤も、三単一に対する盲目的追従は滑稽であると云うことは指摘している。——第3巻——) 彼はもっぱら歴史家としての立場からロマン主義の起源をたづね、それをキリスト教に、中世に (物語り、バラード、騎士道に)、また troubadours の詩歌に、イタリアの Renaissance に見出している。そして偉大なる genre の詩歌が持つべき目的はすくなくとも、美術と同様現実の世界を理想の世界に置きかえることであろう。従って現代の文学は我々の心に訴え、想像の世界に向って進む時期に来ている様に思える、と云うことを述べている。

フランス古典劇の主人公についてもフランスではギリシャ・ラテン文学の規則を厳格に踏襲しているため、イタリア、スペイン、イギリス、ドイツ等フランス隣国の劇の主人公とは余りにかけ離れ、現代に生きる我々の心にちかに訴えるものが見られない。常に古典に関する色々な書物やそうした知識・記憶を通してでなければ容易に理

解する事が出来ない、また作者が何にか新しい感情を表現すると、その都度その感情は昔時の作者の引用と比較され正・否が判断されるのが genre classique であるが、genre romantique では、主人公は我々に何らの予備知識がなくても我々の心の中にとけこむと述べている (第2巻157-159頁)

Sismondi の作品が新しい派に大きな効果をもたらしたのは作品の内容よりも、4巻の主題そのものなのである。即ちフランスを取り囲む隣国への関心と云う点である。前に述べた Académie des Jeux Floraux の Maître である Raynouard の “Troubadours” 研究 (第1巻を1816年発表) も Sismondi のプロヴァンス文学の研究に対する啓示があったればこそ、生れたものであると云えよう。

Schlegel は Madame de Staël と共にワインマルからコペーにやって来た博識なドイツ人で、ドイツに関しては一切 Madame de Staël の師であったが、彼女と根本的に違う点は彼がカトリック教徒であったと云うことである。彼の3巻からなる「劇文学講義」では第1巻の初頭から classique と romantique が判然と対立している。彼はギリシャ、ローマ、近代フランスを一群とするものを classique 文学とする、これに対し Renaissance のイタリア、スペイン (特に彼はスペインに心酔していた)、英国、ドイツを他の一群とみ、これを romantique 文学として示している。従って classique の規則の尊重に対しては romantique の靈感の自由、goût に対しては génie、現世的楽しみに対しては mélancolie、また classique の客観性に対しては roaurantique の主観性を挙げ、双方とも同等の美、同等

の権利を主張し得るものであるとする。(しかし、trois unités に於いては classique が主張する unité de temps と unité de lieu に対する Schlegel の態度は可成り厳しい。第2巻99頁より120頁)

Schlegel が romantique を論ずる場合は常にカトリシズム的審美観に立って論を進めていると云うことを重要視しよう。例えば、精神文化の大きな方向転換は中世に広まるキリスト教の影響にあると云うこと、またキリスト教は外観の儀式に満足せず、魂の気高い独立を望む。北方民族の粗野な英雄主義がキリスト教の感化を受け、その混合から生れた騎士道、愛、名誉の尊重、そしてそれが詩歌の対象になっている。北方詩歌の特色たる mélancolie はキリスト教的内的生活と北方人の性格との結合から誕生した等が挙げられる。しかし Chateaubriand の「キリスト教精髓」 Génie du Christianisme (1802) と同一視することは出来ない。情念の解釈には類似点もみられるが、Chateaubriand はフランスの古典にみられるキリスト教的作品を大いに讃えているのに反し、Schlegel は飽く迄もフランスを囲むドイツ、イギリス、スペイン等の作品を称揚している。(Chateaubriand は Racine, Pascal, Bossuet, Fénelon 等の作品の美を説明するが、Schlegel は Shakespeare や Calderon は romantiques だが Racine は Classique であると説く。)

彼はまた romantique の特質をこうも述べている。

“L’art et la poésie antiques n’admettent jamais le mélange des genres hétérogènes; l’esprit romantique, au contraire, se plaît dans un rapprochement continu des

choses les plus opposées. La nature et l’art, la poésie et la prose, le sérieux et la plaisanterie, le souvenir et le pressentiment, les idées abstraites et les sensations vives, ce qui est divin et ce qui est terrestre, la vie et la mort se réunissent et se confondent de la manière la plus intime dans le genre romantique.

「古代の詩歌、古代の芸術は決して互に異なるジャンルとの混合を許さない。これに反し、ロマンティック精神は最も対立する事物の絶えざる接近の中で楽しむ。それがため、自然と芸術、詩と散文、真面目な事柄と冗談、思い出と予感、抽象的理念と生々とした感情、天上のものと地上のもの、生と死がロマンティック様式では最も打ち解けたやり方で一緒になり、互に混り合うのである」(第2巻328頁)

従って、romantique 文学はこれから創造されるべきものでなく、もともと存在するのである。いな、存在するのみならず、その存在を伸ばすのに適しており、それが生きている現代には古典文学より遙かに良く適応されるものである。この事は、とりわけ演劇に於いては真実で、drame romantique は現実の姿であり、悲劇のテクニクに優るものを持っていると主張する。

この様に Schlegel は問題を前述の Sismondi よりも、またそれ以前に発表された Madame de Staël の「文学論」“De la littérature” (1800) よりも、それから Benjamin Constant の「ワルシュタインの悲劇並びにドイツ劇に関する考察」“Réflexion sur la tragédie de Wallstein et sur le théâtre allemand” (1808) よりも一層明確に、しかも広範囲に亘ってとらえ、genre roman-

tiqueこそ北方民族の文学的特質であると、説明している。

Charles Nodier は Schlegel のこの作品について Journal de l'Empire 紙上に独自の批評を下し、美は classique であるから、Shakespeare は classique であり、romantique は classique の一変化に過ぎないと反駁する。しかしそう云う Nodier はそれでは classique かと云うと、そうでもない。Richardson と Gessner の作品は早くから彼の心をとらえて離さなかったし、1819年には V. Hugo の Conservateur littéraire にも協力している。また Madame de Staël の「ドイツ論」をも讃えている。しかし彼女の小説“Delphine”と“Corinne”に対しては酷評を浴びせている。小説家としての Nodier は1820年には roman noir を発表し、若い世代の文学的欲求を満足させる術も心得ている、がその序文では、フランスの作家は Byron が有名にした vampires の題材には絶対手を出すべきでないと忠告している。また Raynouard や Marchangy のフランスの中世を取扱った作品については好意をもって解説している。そしてアルスナルの会合には多くのロマン派を招いて愉しんでいる。しかし、その反面よきフランス人として伝統的 goût に注意を払うことも要求している。(特に goût の点では Racine を激賞する)。また、フランスの romantique は滑稽で、不快な genre であるとも述べている。要するに彼は自分の流儀に従って自分に都合のよい時だけ文学流行を辿り、どちらの派とも云えず、常に自分の世界に閉じこもって時代を過ごした作家であると云えよう。

さて、翌1814年4月に Napoléon が退位

し、5月には Madame de Staël の「ドイツ論」が今度はフランスで出版された。

Madame de Staël の「ドイツ論」が前述の Schlegel の影響を大きく受けていることは云う迄もない。4部(第1部ドイツとドイツ人の習俗について、第2部文学と芸術について、第3部哲学と道徳、第4部宗教とアントウジアスム共感)からなるこの大作には、Thibaudet が指摘するまでもなく「誤謬と軽卒とがふんだんにある」が、時代的に最も大きな影響を与えた作品と云う点で、重要視されねばならない。即ちロマン主義のいわば形式、風土なるものをフランスに作り出した作品である。Klopstock, Lessing, Winckelmann, Goethe, Schiller, Wieland 等が分析され、フランスを支配している規則にしばられた狭い芸術を批判している。なかでもロマン主義に関する重要な箇所は第2部第11章 Poésie classique et poésie romantique の章である。彼女は文学を南方と北方に別け、(この区分は1800年に発表した「文学論」の中にも見られる(第1部第11章)が、そこでは classique と romantique と云う用語では説明されていない。)南方はパガニスム異教、ギリシャ・ローマ制度下に咲いた文学で、古代の goût であるとし、一方北方はキリスト教、中世と騎士道下に生れた文学で、現代の goût として、classique と romantique を区分している。そして、フランスは南方文学の影響のもとにあり、イギリス、ドイツは北方文学に属するとしている。更に古典詩歌は外的な物質と同じ様に単純で奇抜であるが、キリスト教的詩歌には passion に訴える人間の心に根ざすものがあるとしている。しかも彼女が問題にしたいのは、ただ古典の規則を

信奉しているクラシック的模倣と、ロマンティック的靈感との相違にあるので、古代人を踏襲する文学は移植されたものに過ぎないが、ロマンティック文学は我々にとって土地固有のものである。従って古代人によって作られた詩歌が如何に規則に於て完全であるにせよ、現代では国民に通じるものは何にもない。これに反し、我々自身の土地に根をもったロマンティック文学は新たに生育し活気を呈し、完成され得る可能性のある唯一のものであるから、この我々の歴史、我々の古代を呼び起す文学を学ぶべきである、と云うことを述べている。

これは *romantique* の形式及び名称を示した点で大きな反響を呼び、その年の10月にはトゥルーズ生れで Académie des Jeux Floraux の若年26才の Soumet が「ドイツ論」を批判し “Les Scrupules littéraires de Madame la baronne de Staël ou Réflexions sur quelques chapitres du livre De l’Allemagne” 「スタール男爵夫人の文学的小心或は「ドイツ論」の書の数章に関する考察」を出した。（ただし自分の名を付けなかった。）Soumet は彼女の理論を大部分認め、彼女の理想主義、共感に対する尊敬、人間性の完全可能性に対する彼女の信念、*génie* に対する思考、悲劇と叙事詩に対する批判等に同意しているが、しかし彼は彼女の意見の表現がつつましすぎ、憶病であるとする。堂々と *genre romantique* と云う用語をどしどし使用すべきである。また *classique* の三単一に対しても、何故あれ程膝をくっして語るのか、ドイツ劇の美を語るのにも、何故ためらいがちなのか。この様に Soumet は Madame de Staël の小心に対して、もっと強く押す

ことを主張している。当時 Soumet は最も熱狂的なロマン派の一員であり、Madame de Staël 以上にロマン派の理論と詩的靈感と想像力の必要性を強調するのである。

この小論が両派の論争を掻き立てることになり、ロマン派が次第に強くなると、それに対抗する伝統的古典派も負けずに反撃する。古典派の Dussault 並びにその一派は最早敵をあなどらず「同じ武力で、砲兵には砲兵を向けて戦わねばならない。だから古典派諸君は自分等の軽分隊を後退させ、大砲を用意すべきである。しかも、急ぐ必要がある。危険が迫っているから、若し古典派諸君が急がないと、我々は内陣で大きなつまずきを見るほどおどかされている。」^③と警告を発している。Nain Jaune 紙上に皮肉たっぷりな “Confédération romantique” が現れたのもこの頃である。そして翌1815年の末に Saint-Chamans は “L’Anti-Romantique ou Examen de quelques ouvrages nouveaux” 「反ロマンティック或は若干の新作品に対する検討」を書き上げ、翌年3月に発表して、ロマン派が誤りを普及させるならば、作家は美しい作品を作ることが出来なくなり、皆狂人か滑稽なものになるであろうと、激しく非難する。^④ この作品は今日では殆んど読まれないが、当時は古典派を代表するものとして高く評価され、多くの新聞雑誌が好評を寄せている。また古典派の牙城である Journal des Débats 紙に於いても4月26日付で Féletz が作品に対する讃辞を述べているので、この “Anti-Romantique” は文学史的価値からみれば可成り重要な位置を占めるものである。第1章 *genre classique* et *genre romantique* の定義にはじまり第

12章総括で終り 413頁に序文 29頁が付加され、第3章の三単一や、第6章の du goût と古典悲劇で、フランス古典文学の優位性を強く説いている。Saint-Chamans は Sismondi と Schlegel の作品に見られる欠点と矛盾を指摘するが、特に Madame de Staël の「ドイツ論」に対する反駁は強く、「ドイツ論」の文章を引用して、その反証を詳細に述べている。古い時代に属していた彼は夫人の理論の中に見られる革命的精神に疑惑を持つため、ロマン主義の定義の不安定さと瞬味さを容赦なく攻撃したのである。

1816年5月には Constant の“Adolphe”が発表され盛んに売れるが古典派からの攻撃は激しかった。この作品に描かれた魂は romantique であるが、その文体の簡潔さ、またその分析的な精神と冷徹な芸術的制御力は classique 的である。更にこの作品はコペーの館の連中に対抗する意図のもとに書かれたのであってみれば、作者の気持はむしろ反ロマン的であったとみる方が妥当かも知れない。10月には Lamartine がブルジェの湖で Madame Julie Charles を知る。11月に Chateaubriand は“De la Monarchie selon la Charte”「憲章による王政について」を発表して、ultra-royalistes の首領として活躍する。そして彼を敬愛する若い詩人達は royalistes romantiques となり、年輩のものは royalistes classiques となる。A. Soumet は Archives Philosophiques 誌で1817年再びロマン派の詩的ジエニーの高揚につとめる。かくて、1818年に入ると古典派とロマン派の争は日常の問題となり、Académie française に於いても genre romantique なるものの定義をコ

ンクールの題材に取上げられることを考えはじめたが、時期尚早のためか、実現に至らなかった。そこで翌年4月地方アカデミーとして最も勢力のあった Académie des Jeux Floraux が早速この問題をコンクールに取上げ、既述の論文題目を発表したのである。これには前年 Maître-ès-Jeux Floraux から Mainteneur に移った Soumet の力が大いにあづかっていることは前にも述べた。



さて、こうして文学者の思考に最も適したものと提出されたコンクールの問題に応募した者は残念ながら2名にすぎなかった。そして、その1名は genre romantique を容赦なく排斥する。それは批判と云うより非難のみで論文としての価値を失っている。いま一つは前のとは反対に二つの文学の和解を提案しているのだが、その動機が全くイリュージョンに過ぎず、内容にみられる教義も理由付けも方法も弱いし、応募者自身がまだこの論文を書くだけの知識をそなえていないと云う結果に終わった。従って1820年度には受賞者なしと発表された。しかし、この興味ある問題に作家の関心を引くために、アカデミーでは平常の賞金450フランを倍額の900フランにして再度同じ問題でコンクールを開いた。

第2回目には7名の応募者があったが、アカデミーを満足させ得る論文はやはりなかった。そこで、いま一度第3回目をやってみようとう考えも出たのであるが、1819年以来この種の問題はフランス全土で取り扱われだしたので、第3回目は遅すぎるとして取り止め、結局不本意ながらアカデミーは応募者 G 即ち無名の M. de la

Servière の論文に賞を与えて終った。

この入選発表（5月）以前に Duviquet の論文 “Discours sur la distinction des genres classiques et romantiques” 「クラシックとロマンティックのジャンに関する区別論」がパリーの文芸協会から2月に発表されているし、デイジョンのアカデミーでも Théophile Foisset が8月であるが “Du genre romantique et des conséquences pour la langue et la littérature françaises”

「ロマンティックのジャンルとフランス語学・文学に対するその帰結について」を出しているので、Académie des Jeux Floraux が第3回迄受賞をのぼすことは、こうした周囲の事情から察して中止したのである。しかし実際には1824年に至ってロマン主義理論闘争は最も激しく展開されたのであるから、第3回募集を行っても決して遅くはなかった様に思われる。

De la Servière は華賞として金賞「野バラ」を貰い賞金900フランも同時に受けた、最後の総局に廻された作品は B. F. G. の3つで、作品 F は4月27日、B は29日に落とされ、G (de la Servière) が最後まで残ったのである。しかし第一事務局で落選した A は Adolphe Thiers の論文であり、C は Gaspard de Pons のもので、D は Nicot の作品で、いずれも de la Servière より知られた作家で、しかも論文内容も劣っているとは思われない。入選を予期していた Thiers の如きはアカデミーに文句を云い、以後当コンクールには決して応募しないと云う書翰^⑤を出している。また V. Hugo は友人 Gaspard de Pons の論文を応援するため、3月28日付で終身書記 Pinaud に、またその一週間前の21日付では J. de Res-

séguier に推薦状を書いているが、作品は総局にも廻されなかった。Nicot の論文はロマン派に加担しすぎているために落とされたのである。この他落選者の一人である Julius Castelnau は Madame de Staël の影響を受けた、非常に知的な文学者で、彼はアカデミーに提出した論文に手を入れ “Essai sur la littérature romantique” 「ロマンティック文学試論」と題して1825年に発表している。

それでは受賞者 de la Servière の論文をみることにしよう。アカデミーとして気に入った受賞者がいなかったのであるから、彼の論文も当らず、さわらずと云う内容で、彼が述べんとする教理も余り明確でない。却って、その点が A. Soumet や Rességuier 以外の委員達に受け入れられたのであろう。論文は romantique の特質を述べているが、論文全体から感じられるものは、作者自身が classique の立場にあって筆を進めていることが理解される。

彼は Madame de Staël の思想で強く鼓吹されたイギリスとドイツの詩歌を述べ、これに対しフランスの若い詩人に課せられた新しい課題を取り上げる。即ち「作家たるものは自分のジェニーだけを聞き手にしなければいけない。また規律と模倣はジェニーの火を消してしまう。詩は技術に全くとられるものではない。文学に値しないものはこの世に何一つない。詩人は牧人も英雄も同等に描写する。詩の目的は熱情をもって理想の世界に我れを導くことにある。

詩人は自分の題材を自分の靈感に一致する方法で取り扱わねばいけない。また細かいことばかりに拘泥して、全体をそこなう小心的ゲーに頼ってはいけない。詩人は形

式は何であろうと、社会のためにも崇高で民衆的であらねばならない^⑥」と云っている。

そして、de la Servièrre は Young, Byron, Thomas Moore, Schlegel を讃える。

次に宗教と romantique 文学にふれ、聖書にみられる詩の部分は romantique 文学の真の典型であるとする。また地上の苦しみと天上の喜びを対峙させ、現世悪と彼岸の希いの源泉を作りだしたキリスト教こそ我々の心につきせぬ夢を抱かせ、現世に対する嫌悪をつのらせ、古代人の味わなかった *mélancolie* を産み出させたとしている。そして“Paul et Virginie”も“Atala”も宗教と人間と、人の心の情熱との見事な調和であると述べる。か様に詩的豊かさの源泉を宗教に求めているのが *genre romantique* であると述べている点では Schlegel の理論が強く取り入れられている。しかし、Goethe の“Werther”に対しては、人々の心に自殺を植えつけるものとして激しい非難を向けている。Schiller^r の“Brigands”に対しても青年をそこなわせるものとして遺憾の意を表している。そうした文学は背徳的であるから、フランスに於てはこのような誤った歩みを抑制しなければいけないと云う。

そして最も大切なことはフランスを常に不動である真理に向って導いて行くことである。「思想がどのような自由をもち、想像がどのように飛躍し得ようとも、人間に付与された最も気高い理性はつねにその帝国を保持しなければならない。理性はジェニーを奴隷化したり、抑制したりするものではなく、それどころか、あらゆる大胆さ、

また最も崇高な情熱に赴くのである。理性のみが作品に真価と光輝を与え得るもので、作品を如何なる時代にも如何なる国民にも役立つものとし、作品の不滅を保証し得る唯一のものである。」^⑦と述べている。ここには彼の古典的精神がはっきり打ち出されている。

De la Servièrre の論文の内容は大体以上のようなものであった。

アカデミーでは受賞作品としてこれを発表するにあたり、終身書記 Pinaud が可成り長い論文を付け加え、応募作品をそれぞれ批判しながら、アカデミーの見解を述べている。彼は応募者はいづれもロマン派か古典派のどちらかに傾き過ぎ、出題の内容を明確に把握していない。とりわけ問題の前半と後半に対する正しい解答を出しているものが一人もいなかったのは遺憾である。そうした結果に終わったのは応募者の問題に対する研究が浅かったためであろうと云っている。

Pinaud は A. Soumet や J. de Res-séguier 同様 romantique 文学に理解のある Mainteneur であるから、結局現代文学は大衆を感動させることである。詩人や劇作家の最も望ましい成功は最も強い感動をまきおこすことにある。また自然を忠実に模倣することも現代文学の重要な要素である。従って人為的に規則をきびしく守る従来の文学が大衆から離れて行くのも致し方ないであろう、と云う結論に達している。

一方、この年の詩歌の部門では François Holmondurand の ode “Le jeune poète mourant” と、Joseph Rocher の poème “L’immortalité de l’âme” と他二篇の épîtres

が入賞した。また機関誌には V. Hugo が Maître として送った ode “Quiberon” や Mainteneur である J. de Rességuier の élégies “Glorvina”, “La mort d’une fille de village” が受賞作品と共に掲載されている。その翌1822年の詩歌のコンクールには、Hugo が推薦した若い詩人 Durand の “Le détachement de la terre” が入賞し、この詩の冒頭には Chateaubriand の作品「ルネ」の中にみられる有名な句 “Levez-vous vite, orages désirés, qui devez emporter René dans les espaces d’une autre vie.” が引用され、天上への憧憬が詠まれている。いま一つの入選作は閨秀詩人 Madame Amable Tastu の ode “A l’étoile de la lyre” で、これにも Chateaubriand の「殉教者達」の句 “Ils écoutent les concerts inconnus du Cygne et de la Lyre céleste.” が冒頭に引用されている。この作品もキリスト教的王党的栄光をミューズに託したものである。その他の入選作 élégie “Prière d’un jeune poète à la Vierge” も hymne の “En l’honneur de la Vierge” もキリスト教的靈感への讚美を歌った作品である。また、Rességuier はこの年には自作を三篇も掲載しているし、Hugo も ode “Le dévouement dans la peste” を一つ送っている。

こうした詩歌の受賞作品をみると、当時の Académie des Jeux Floraux が好む作品は romantique の中でもカトリック的で王党的なもの、即ち Chateaubriand 的傾向のものであることが理解出来る。そして、実際には Soumet や Pinaud や Rességuier 以外の Mainteneurs には文学者と云うよりも、市長、知事、判事、貴族、高僧と云っ

た地方名士が多く、彼等はいづれも古典芸術の伝統を守りたがり、またそれを守るのがアカデミーの任務であるかの如く考えているので古典派の立場にあった。要するに、前にも述べた如く Chateaubriand を敬愛する若い詩人達は royalistes romantiques となり、年輩のものは royalistes classiques となったのである。受賞に先立ち、セアンスで Saint-Chamans の “Anti-Romantique” の一部が朗読されたことも、その一面を示したものと見る事が出来よう。それがため、Soumet と Rességuier がパリーに出て、Pinaud もメッスに移ると Académie des Jeux Floraux は俄かに romantique 的色彩を失って来た。V, Hugo も彼等のいない Académie des Jeux Floraux には関係がなく、以後疎遠になる。

それに代わっていま迄このアカデミーで活躍して来た会員や受賞者達即ち Soumet, Guiraud, Rességuier, V. Hugo 等がパリーに於いて1823年7月に Nodier, Deschamps の協力を得て La Muse française を創設した。新しいロマン派が古典文学の根強い首都パリーに於いても、充分古典派と戦闘を交え得るまでに機が熟して来たのである。かくして、翌1824年元旦に Guiraud が La Muse française にロマン派の “Nos doctrines” 「我等が教理」を掲載して、ロマン主義理論闘争の火蓋は切られる。

- (1) Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle
- (2) Chateaubriand の1821年8月7日付書翰
- (3) René Bray; “Chronologie du Romantisme” P. 16
- (4) Saint-Chamans; “Anti-Romantique” P. 413
- (5) A. Thiers の1821年6月8日付書翰
- (6) F. Ségu; “Académie des Jeux Floraux et le romantisme” P. 104
- (7) Ibid, P. 107

主なる参考文献

- F. Ségu; Académie des Jeux Floraux, 2 vol Les Belles Lettres, Paris 1935
René Bray; Chronologie du Romantisme, Nizet, Paris 1963
Pierre Moreau; Le Classicisme des romantiques, Plon, Paris 1932
Pierre Martino; L'époque romantique en France, Hatier-Boivin 1959
Mme de Staël; De l'Allemagne, (Les Grands Ecrivains) Hachette, Paris 1958
Saint-Chamans; L'Anti-Romantique, Lenormant, Paris 1816
Marianne Held; Charles Nodier et le romantisme, Berne 1949
Théophile Foisset; Du genre romantique, Dijon 1821
Charles Lacretelle; Discours prononcé à la Société Royale des Bonnes Lettres, 1823
Michaud et Van Tieghem; Le Romantisme, Hachette, Paris 1952
Van Tieghem; Le mouvement romantique, Paris 1912
A. Soumet; Les scrupules littéraires de Madame de Staël ou réflexions sur quelques chapitres du livre De l'Allemagne, Paris 1814
G. Charlier; Le sentiment de la nature chez les romantiques français, Paris 1912